

Wallace Stevens の多面性

エレジーと自然環境、共同体倫理の交差

古村敏明

Wallace Stevens in Context (2017) や *The New Wallace Stevens Studies* (2021) などに代表されるように、21 世紀が進むにつれ、Wallace Stevens 研究は、Stevens 作品の多面性に焦点を当てるようになっていく。エコロジー、トランスナショナルリズム、コミュニティ、Urban Studies、認知科学、等々、様々な視点から Stevens 研究が進められている。これは、Stevens の詩の、難解でありつつもシンプルな真実性が、現代的な問いにおいても重要視されている証左である。Stevens 研究が多面的に展開される中、本発表は、複数の視点を統合的に考察することで見えるものを探る。Stevens の詩は、elegiac だが elegy ではなく、ecological だが ecopoetry ではない、人種・ジェンダー・階層などの問いに直接的に関係せずとも関連性はある、というように、あたかも Emily Dickinson の “Tell all the truth but tell it slant” のように、「太陽」を直視しないことで見えるものを描く。本発表では、特に intersectionality, elegy, ecology の交差に焦点をおき、D. W. Winnicott が “a joy to be hidden and a disaster not to be found” と形容するようなアンビバレンスを内包する Stevens の作品群が示唆する、共同体構築における倫理性について考える。

The New Wallace Stevens Studies に収録されている、Johanna Skibsrud が、論文 “Lyrical Ethics” で述べるように、詩は、唯我論的な内面探求性や自己完結性よりも、共同体への参加や他者に対する倫理性を探究する、という考え方は、現代の詩研究において重要である。現代詩の概念化の基盤となっている J. S. Mill の “utterance overheard” — 一すなわち、詩とは他者の会話の立ち聞きである — という考えが、語り手の外に聴衆を含む人間関係が存在していることを前提としていることなどからも、詩は自己完結性の芸術ではなく、共同体性の芸術であることが示唆される。従来 Stevens の作品は自我や introspection などの視点から語られることが多かったが、共同体構築における倫理性の考察に Stevens 作品がどのように貢献しているかを探究することには、学術的意義が存在する。

まず、Stevens の作品を共同体性と人種という観点から考える。Stevens と人種という主題について最初に言えることは、Stevens が人種に関して進歩的な考え方を持っていたと主張する研究者はあまりいない、ということである。むしろ、Stevens は人種差別的な考えを持っていた、作品の中でのマイノリティの扱いも表層的で一種のステレオタイプの表現にとどまることが多い、という評価がほぼコンセンサスである。だが、Stevens の人種観ではなく、Stevens の詩がどのように他人種の作品に影響を持ったか、という視点で分析するとより生産的なものが見えるのが、代表作の “The Snow Man” と、後期作品の “The Sick Man” という詩である。Stevens 作品からインスピレーションを得たマイノリティ詩人は、Thylas Moss や Terence Hayes など多岐に渡る。Lisa M. Steinman の論文 “Intersectional Studies” は、ambiguity と ambivalence が Stevens 作品の特徴であると説き、黒人系作家が、Stevens 作品のそれらの特徴と向き合うことで、Henry Louis Gates Jr. の *The Signifying Monkey* (1988) や Ralph Ellison の *Invisible Man* (1952) などに見られる、終結に抵抗する、複雑性を避けない作風を作り出してきた、と主張する。

この ambiguity と ambivalence という視点で、“The Sick Man” を読解すると、この詩は、ほぼわかりやすい形で、“The Snow Man” と繋がっていることが見える。聞き手 listener という中心人物と、その名詞・動詞の繰り返し、そして、冬の言葉 the words of winter などのフレーズから、“The Snow Man” の呪縛から逃れえない作品と言える。“The Snow Man” は、内容の曖昧さ以外にも、題名自体に、雪だるまを指すのか、雪の中にいる人を指すのか、という意味の不明瞭性を内包している。さらに、その題名の音も、“The Snow Man” をゆっくり読めば、“This No Man” と聞こえる、という不明瞭性を有している。そして、この No Man、誰でもない人間は、Everyman、誰にでもなりうる人間へと変容する。“The Snow Man” から、その言葉上の意味不明さにも関わらず、読者は、人間性と普遍性の核のようなものを見出すことが、“The Snow Man” が時の審判を経て読み継がれている理由の一つである。Helen Vendler の “Stevens and the Lyric Speaker” や Bonnie Costello の “Collecting Ourselves: ‘We’ in Wallace Stevens” などの論文で、Stevens が一人称複数形の we を生涯を通して多用してきたことについて考察がなされているが、特に前者は、一人称複数形の不特定性が、時にアメリカの集合的意識を表現すると主張する。それらの論を踏襲し発展させるなら、ambiguity から成る奇妙な包摂性が、Stevens のレトログレードな人種観と多様な読者からの受容性との共存を可能とする、ambivalent な共同体意識を作り出す。

Ambivalent な共同体構築という主題は、Stevens の「エレジーではないがエレジー的な」作品群にも表れる要素である。Stevens 作品の特徴の一つは、後期作品の “The Rock” の一節 “It’s an illusion that we were ever alive” などに象徴される、虚構に対する信念とも言える思考である、と考える研究者は多い。この「虚構に対する信念」とは、私たちが知覚できる現実世界は、虚構・フィクションでしかないが、同時に、その虚構・フィクションが、存在する全てであるので、それを作り物として拒絶するのではなく、虚構であることを認知しつつも、真実であるか

のように信じる、という ambivalent な信念のことを指す。そして、共同体意識に懐疑的でありつつも、共同体意識という虚構を信じる、というアンビバレンスが如実に表れている作品が、“A Postcard from a Volcano”である。この詩は、自然災害などによる世界の破滅によって世代間の文化や意識の断絶が起き、ある世代と次の世代とで共通項がなくなった、もしくは共通項が認識されなくなった状況で、その断絶を超越する想像力が生まれうるか、という思考実験のようなものだが、この「共通項がない他者に対する想像」が、Stevens の共同体意識の構築の根底にある。「共感」は、自分と他者との共通項を通じて理解を形成することで得られる親近感情のように捉えられることが多いが、Stevens の作品が提示する想像力とは、類似性から生まれる親近感に基づく他者理解の失敗から生まれる。共通項がなくても、あるいはむしろ、共通項がない中でこそ必要とされる想像力の倫理性という、Judith Butler が著書 *Precarious Life* で説く倫理性に近い考えである。Butler の倫理性の思想は、radical empathy という概念でしばしば語られるが、radical empathy とは、つまり、共感とは、自分自身と重ね合わせることができない、差異を埋めることができない絶対的他者の存在を前提に、それら絶対的他者性にこそ共感が向けられるべきである、という考えである。Stevens のエレジー的作品の共同体意識に潜む共感性は、他者との類似に基づいていない、という意味で、radical empathy の要素を含むと言えるが、同時に、彼の作品が多用する一人称複数形は、他者との差異に必ずしもセンシティブであるとも言えない、という曖昧性も含む。これも、マイノリティ詩人の Stevens に対する感情が敬愛と批判が入り混じったものになる一因だが、Stevens の多面性とは、一つには、このどちらとも言えない、the snow man が this no man でもあるような曖昧さに、依拠している側面はある。どちらでもないということはどちらにもなりうる、という可逆性論理を用いるなら、Stevens 作品が示す包摂性は、同一性や類似性とは異なる別のロジックで動いている、他者に対する責任と想像という倫理性に基づく共感性、つまり倫理的共感と呼ぶべき概念を基盤とする共同体意識であると考ええる。

なぜ Stevens の作品が多面的に解釈され、現代も読み継がれる耐久力を持ち続けるのか、という問いの答えの一つは、Stevens 作品が体現する、共通項を見出し難い絶対的な他者にも向けられうる想像力が作り出す、倫理的共感にあるのではないかと想像する。その倫理的共感性は、Stevens の ecopoetry ではないが ecological な作品からも読み取れる。例えば、“Poetry Is a Destructive Force”という詩は、詩が野性的なものであると示唆するが、この詩を素直に読むならば、詩が野性的な動物、特に人を殺すこともできる暴力的な力の象徴としてのライオンに喩えられている、という解釈が妥当である。だが、もし、メタファーの reversibility 可逆性がこの詩に適用されると考えるなら、詩がライオンに喩えられていると同時に、ライオンが詩に喩えられている、という読み方も可能になる。Stevens 作品の曖昧性は彼の作品の全体的な特徴とも言えるが、その曖昧性に包まれた、理解が困難な他者性が、Stevens の動物描写における共通項として見えてくる。動物たちが、人間社会の枠を超えた、自然界全体という共同体の構成員であると考えれば、Stevens の ecological poetry から、倫理的共感の輪郭が見える。倫理的共感、つまり、類似や共通性に基づかない、他者に対する責任と想像に基づく、共同体における倫理性は、人間社会のみが対象ではなく、より大きな共同体も対象となりうる、ということ、Stevens の動物詩は示唆する。

この発表では、Wallace Stevens の詩の多面性とは何かを、複数の subfields を横断して考えることで見えてくるものを探求したが、以下が結論となる。まず一つ、Stevens の詩に内在する曖昧性やアンビバレンスは、多様な作品解釈を可能にするため、マイノリティも含めた後世の詩人や読者たちとの対話を実現し、その結果、Stevens 作品は、現代的な問いや課題についても関連性を保ち続ける。二つ、Stevens 作品に頻出する一人称複数形の語り手の語りは、共同体意識が虚構であると認識しつつも、それを信じたいという、「虚構に対する信念」の一つの形であり、その信念は、同様の感情を、読み手に想起させる。そして三つ、絶対的他者も対象とする共同体意識の構築においては、類似性に基づく所謂一般的な感覚の「共感」でもなく、他者性を重視に基づく radical empathy でもない、自己・他者という軸とは異なるロジックによる、責任と想像という倫理性に基づく共感性、倫理的共感とここで呼称する概念が、Stevens 作品が示唆する共同体倫理の根幹にある。詩は、唯我論的な内面探求だけでなく、共同体への参加や他者に対する倫理性の探求でもある、という概念 (lyrical ethics) が、Stevens の多面性の基盤であり、そして、Stevens 作品が提示する共同体倫理とは、類似性・他者性という軸や、理解できる・できない、「共感」できる・できない、という軸とは関係なく存在する、想像と責務に依拠する「倫理的共感」である、という仮説的結論を、本発表は提示する。

Butler, Judith. *Precarious Life: The Powers of Mourning and Violence*. Verso, 2004.

Costello, Bonnie. “Collecting Ourselves: ‘We’ in Wallace Stevens.” *ELH*, vol. 85, no. 4, 2018, pp. 1065-1092.

Eeckhout, Bart, and Gül Bilge Han, editors. *The New Wallace Stevens Studies*. Cambridge UP, 2021.

MacLeod, Glen, editor. *Wallace Stevens in Context*. Cambridge UP, 2017.

Stevens, Wallace. *Collected Poetry and Prose*. Edited by Frank Kermode and Joan Richardson, The Library of America, 1997.